

18 世紀イギリス領アメリカ植民地における奴隷の改宗

青柳 かおり

はじめに

イギリス領アメリカ植民地においては、イギリスのみならずヨーロッパ諸国からの移民が定住し様々なキリスト教宗派が存在していた。ニューイングランドでは会衆派などのプロテスタント非国教徒系教会、南部のヴァージニアとメリーランドではイングランド国教会が有力であったが、アメリカ植民地における宗教状況は多様であった。イングランド国教会は植民地においては少数派とはいえ、イギリス本国の最大の宗教的勢力である。その公式の布教団体である海外福音伝道協会 (the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 以下、SPG と略記) は異教徒、特にアフリカ系奴隷への布教に関わっていた。本稿では、SPG 宣教師や国教会聖職者が奴隷の主人の反対を受けながら、どのように布教や改宗を推進しようとしていたのかを検討し、従来の研究では見過ごされていた SPG の布教の意義を明らかにしたい。

これまで、イギリス、アメリカにおけるイギリス領アメリカ植民地の異教徒への布教についての研究は少なく、SPG の活動への評価は低かった。SPG 宣教師の活動は白人への布教にとどまり、異教徒への布教は不活発であるとみられていた¹。アングリカン・コミュニオンについての研究では SPG による世界中の伝道活動について記述されているが、19 世紀以降が中心であり 18 世紀アメリカ植民地における布教はあまり分析されていない²。SPG 年次記念大会の説教を用いた研究もなされており、SPG がアメリカ植民地において布教していたことが言及されているが、奴隷への布教活動については詳しくない³。

SPG の奴隷への布教に言及した研究においても、プランターから反対されたため布教は成功

¹ John Walsh et al. eds., *The Church of England c. 1689-c.1833: From Toleration to Tractarianism* (Cambridge: Cambridge UP, 1993) p. 15; 青柳かおり「18 世紀前半における海外福音伝道協会とアメリカ先住民」『史潮』64 号 (2008 年)163-164 頁; 青柳「18 世紀前半におけるイングランド国教会と奴隷制—キリスト教徒奴隷の自由—」『イギリス哲学研究』第37 号 (2014 年)15-16 頁; 青柳「イギリス領アメリカ植民地における奴隷制とイングランド国教会—海外福音伝道協会年次記念大会の説教を中心に—」『大分大学教育福祉科学部紀要』第37 号1 巻 (2015 年)89-90 頁。

² H. P. Thompson, *Into All Lands: The History of the Society for Propagation of the Gospel in Foreign Parts 1701-1950* (London, SPCK, 1951); Rowan Strong, *Anglicanism and the British Empire, c. 1700-1850* (Oxford: Oxford UP, 2007).

³ Strong, "A Vision of an Anglican Imperialism: The Annual Sermons of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts 1701-1714," *Journal of Religious History*, vol. 30, no. 2 (2006): 175-198.

しなかったとされている。ギャレーは「奴隷の改宗は長い間 SPG の目的であった。しかし、ほとんどの宣教師はプランターに奴隷を改宗させるよう説得することに成功しなかった。ほとんどのプランターは、彼らの奴隷が宗教的訓練から、宗教的な権利、そしておそらく市民的・政治的権利を主張するようになると恐れていた」と述べている⁴。日本においては、黒崎が SPG の奴隷への伝道活動はあまり成功しなかったとしている。まず、プランターの関心が経済活動にあり黒人の魂の救済にはなかった。さらに、改宗した奴隷が反抗的になると考えられていた。SPG の布教方針では、改宗するために難解な使徒信条や教理問答を理解する必要があり、英語が理解できないと不可能であった。そして、SPG による奴隷への伝道熱は 18 世紀半ばまでには冷めていったとしている⁵。

しかし、SPG の布教活動全体はアメリカ革命の混乱や独立という政治的要因によって衰退したものの、奴隷への改宗や教育への意欲が衰えたのではなく、西インド諸島やカナダなどイギリス領植民地にとどまった地域では 18 世紀を通して布教活動は継続していた。本稿はこれまで注目されてこなかった SPG の奴隷への布教活動を取り上げて分析した新しい研究であり、SPG が主人を説得しながら奴隷を改宗させていったことを明らかにしたい。史料としては SPG の刊行物、年次記念大会の説教、植民地に派遣された宣教師から SPG 本部へ郵送された書簡をまとめた会報、同時代の国教会聖職者およびプランターの著作を用いた。

1. 海外福音伝道協会の設立

(1) トマス・ブレイと SPG の設立

海外福音伝道協会は 1701 年 6 月、国教会聖職者でメリーランド主教代理を務めたトマス・ブレイ (Thomas Bray) によって設立された。17 世紀以来、海外の国教会を管轄していたのは歴代のロンドン主教で、彼らは植民地へ主教代理を派遣していた。ヘンリ・コンプトン (Henry Compton) は 1696 年、メリーランド主教代理にトマス・ブレイを任命した⁶。メリーランドでは主教代理を受け入れるための法律の整備が遅れていたため、ブレイはすぐに出発できず、ウォリックシャのシェルドン教区で主任司祭をしていたが、ロンドンへ移ってメリーランドの主教制教会を支援するための準備をした。

ブレイは聖職者を植民地へ派遣したかったが、希望者や資金が集まらなかった。植民地に渡っても給与が低く出世の見込みがない、本国から離れ孤独で粗野な生活に直面する、ロンドン主教

⁴ Allan Gally, "The Origins of Slaveholders' Paternalism: George Whitefield, the Bryan Family, and the Great Awakening in the South," *The Journal of Southern History*, vol. 53, no. 3 (1987): 380.

⁵ 黒崎真『アメリカ黒人とキリスト教—葛藤の歴史とスピリチュアリティの諸相—』(神田外国語大学出版局、2015 年)51-52 頁。ラボトも同様の見解を示している。Albert J. Raboteau, *Slave Religion: The "Invisible Institution" in the Antebellum South*, updated ed. (Oxford: Oxford UP, 2004) p. 115.

⁶ C. F. Pascoe ed., *Two Hundred Years of the S. P. G.: An Historical Account of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 1701-1900* (London: Society's Office, 1901) p. 4.

以外に後ろ盾となる権威がないなど、様々な理由で本国でのポストの見込みのある聖職者は植民地行きを敬遠したのであった。それでも彼は寄付を募り聖職者のリクルートをした。主教たちが援助したため、大学を卒業した聖職者を招き図書館も建てられることになった。さらに1707年に女王となるアン王女(Anne, 在位1702-1714)も後援者になった⁷。ブレイは1699年12月にメリーランドに渡り、翌年3月に到着後、その夏に帰国した。滞在期間は短かったが、彼は帰国後に植民地各地の状況を覚書に詳細に叙述した。彼によれば、カトリック教会やクエーカーとは対照的にすべての場所で国教会聖職者は不足していたという⁸。

植民地に福音を伝道するためには、十分な人数の宣教師を送り出し維持していく必要があった。ブレイのSPG設立計画にはカンタベリ大主教トマス・テニソン(Thomas Tenison)やロンドン主教コンプトンも関心を持ち、1701年3月13日、ブレイはその案を聖職者会議にかけた。3月から4月にかけて、植民地の住民の間にキリスト教の指導が求められているとして、彼は国王ウィリアム三世(William III, 在位1689-1702)に勅許状を発行してくれるように請願した。同年6月9日、勅許状が与えられ、テニソン、コンプトン、そのほか何人かの主教や聖職者、世俗のメンバーが集まった⁹。植民地における国教会聖職者を維持し、福音を伝道するための援助をするという目的を持って、SPGは設立されたのである¹⁰。当初から、先住民と黒人にキリスト教信仰を広めることは重要な部門の一つであった¹¹。ブレイはSPGが設立されるとシェルドンに戻ったが、その後、1706年から1730年に死亡するまでロンドンのオールドゲートにあるセント・ボトルフ教会の主任司祭を務めた。

聖職志願者たちはロンドン主教のチャプレンによる試験を受け、故郷、家族、教育について尋ねられた。また、ギリシャ語新約聖書の一部をラテン語か英語に訳したり、三十九箇条(the Thirty-Nine Articles)¹²をラテン語にして読み上げたり、さまざまな主題について説明することを求められた。合格すると、ロンドン主教公邸フラム・パレスで国王への忠誠の宣誓と三十九箇条への署名をして、聖職按手式を受けたのである。さらにSPG宣教師志望者は、SPG本部で按手式証明書を示し、ロンドンの教会で説教の審査に合格する必要があった。審査ではSPGのメンバーが審査員を務め、ロンドン主教が参加することもあった¹³。アメリカ生まれの国教徒が聖職

⁷ H. P. Thompson, *Thomas Bray* (London: S. P. C. K., 1954) pp. 15, 16; Patricia Bonomi, *Under the Cope of Heaven: Religion, Society and Politics in Colonial America*, updated ed. (Oxford: Oxford UP, 2003) pp. 42, 44.

⁸ Thompson, *Thomas Bray*, 1954, pp. 57, 58.

⁹ Pascoe ed., pp. 5, 6.

¹⁰ Pascoe ed., p. 8.

¹¹ Bonomi, p. 46; Thompson, *Thomas Bray*, 1954, p. 63.

¹² イングランド国教会の教義を一連の箇条で定式化した公式綱領である。1563年、聖職者会議において1553年の四十二箇条を改訂して三十九箇条が制定された。詳細は徳善義和編『宗教改革著作集』第14巻(教文館、1994年)543-561頁を参照。

¹³ James Bell, *The Imperial Origins of the King's Church in Early America, 1607-1783* (Houndmills: Palgrave

者となるには、聖職按手式をロンドン主教から受けるために危険な航海をして渡英しなければならなかったため、聖職者が増加しなかった。旅費や滞在費は高額で年収の低い牧師にとって非常に大きな負担であったので、教区委員会からの援助が必要であった。

このようにして、SPG 宣教師がイギリス領アメリカ植民地で活動し始め、異教徒にも布教した。SPG 年次記念大会における説教や報告書では、異教徒の野蛮で悲惨な状況の記述がみられた。たいていの説教は異教徒の状況についてふれており、彼らを教え導きたいという希望が述べられている。

(2) SPG の設立目的

ここで、ウィリアム三世による勅許状 (charter) の内容を紹介したい¹⁴。「イングランド王国に属する我々のプランテーション、海外植民地、在外商館 (factory)、それらの場所では牧師は非常に少なく、牧師や神の礼拝を維持することが出来ない。そのような維持と支援がないために、我々の忠実な臣民 (Our Loving Subjects) の多くは神のみ言葉と sacrament の執行を求めており、無神論や不信心に身をゆだねているようにみえる。また、我々の忠実な臣民に真実の宗教の主義において教育をする、学識のある正統派の牧師が不足している。数人のローマの司祭とイエズス会士は、我々の臣民をますます法王主義の迷信と偶像崇拜へ引き込もうと、陥らせようとしているのである。それゆえ、我々は次のことが我々の義務と考える。我々の人々をキリスト教宗教において教育することによって、神の栄光を促進すること。彼らの間に正統派の聖職者が住むために十分な保護を供給すること。これらの地域に福音を伝道するために必要な用意をすること。」勅許状では、イングランドの植民地において正統派の聖職者が不足していること、聖職者を派遣し保護すること、彼らは福音を伝道し、我々の忠実な臣民のためにキリスト教宗教の教育を行うことが述べられている。

勅許状では明記されていないが、異教徒への布教は重要な部門の一つであった。SPG 事務局長デヴィッド・ハンフリーズ (David Humphreys) とロンドン主教エドモンド・ギブソン (Edmund Gibson) の著作には、そのような SPG の目的が表れている。ハンフリーズは『1728 年までのブリテン植民地における宣教師の確立、議事録、成功を含む海外福音伝道協会の歴史に基づく報告』という著書を 1728 年に出版した¹⁵。彼はこう述べている。「SPG は、植民地の何千人ものすべての年齢の男女の黒人奴隷に布教してきた。彼らの多くは教育 (instruction) を受けることができた。

Macmillan, 2004) pp. 159, 160.

¹⁴ *A Collection of Papers Printed by Order of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts* (London, 1712) (以下、Collection と略記) pp. 1-2.

¹⁵ David Humphreys, *An Historical Account of the Incorporated Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts...* (London, 1728). ハンフリーズはこの著書の第10章「ニューヨークの黒人奴隷へのSPGの布教について」を抜粋して、1730年に刊行した。Humphreys, *An Account of the Endeavours Used by the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, to Instruct the Negroe Slaves in New York* (London, 1730).

ギニアから連れて来られた成人も、日常の問題を十分理解するほどすぐに英語を学んだ。黒人の両親の子供は完全に英語で育てられた。協会は黒人の教育と改宗を彼らの関心の主要な部門とみていた¹⁶。」

ギブソンは1729年、プランテーションにおける主人と女主人、そして宣教師に向けた『ロンドン主教の二つの書簡』を出版した。その序文において「最近、我々の海外プランテーションに送られた次の二つの書簡の目的は1)そこでの主人と女主人に、彼らの黒人をキリスト教信仰において指導するという義務があることを確信させること、2)それに対してよくなされる反論に答えることであった。そして3)様々な教区内の牧師と教師に…この良い務めを支援するよう勧告することであった」と書かれている¹⁷。

確かに、勅許状において設立の目的には特に先住民や黒人奴隷に布教するようには明記されておらず、我々の忠実な臣民のためにキリスト教を伝道するという表現になっているが、SPGが白人のみならず異教徒のために設立されたことは明らかである。

また、1741年のSPG年次記念大会の説教の巻末に収録された会報では、黒人奴隷への布教について協会による見解が掲載されている¹⁸。「協会は常に我々のプランテーションにおける黒人の教育について、彼らの一つの偉大な部門として考慮してきた。それゆえ、様々な植民地の宣教師にその目的のためにすべての適切な行動をとるように指示した。黒人奴隷の主人にこの良い仕事を促進するという偉大な義務を徹底させるように指示した。…黒人の教育のための基金が設立され寄付がなされた。…何千人の黒人が教えられ、イエス・キリストにおける真実を信じるように説得された。」

異教徒への布教という目的はSPG年次記念大会の説教からもうかがえる。たとえば、SPG事務局長フィリップ・ベアクロフト(Philip Bearcroft)やセント・アサフ主教ロバート・ヘイ・ドラモンド(Robert Hay Drummond)は次のように述べた。

「SPGは教会に聖書と祈禱書を備え付け、教区図書館を建てた。アメリカ中に宣教師の手によって多くの敬虔で効果的なパンフレットや良い書物を広めてきた。これら全体で何千ポンドの支出になった。これらの手段によって、救いをもたらす神の恩恵がアメリカの我々の貧しい見捨てられた兄弟にも現れた。これらの手段によって、彼らの間で労働する貧しくて闇につつまれた黒人と、彼らとの境界にいる野蛮な先住民への光に生命と不滅がもたらされた。すべての人を救い真実の知識へ至るようにする協会は、彼ら自身の兄弟[白人]だけでなく、奴隷・自由両方のこれ

¹⁶ Humphreys, 1728, p. 232.

¹⁷ Edmund Gibson, *Two Letters of the Lord Bishop of London: The First, to the Masters and Mistresses of Families in the English Plantations Abroad; ...The Second, to the Missionaries There...* (London, 1729, rpt., 1760) pp. 3, 4.

¹⁸ Thomas Secker, *A Sermon Preached before the Incorporated Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts at Their Anniversary Meeting in the Parish Church of St. Mary-le-Bow* (London, 1741) pp. 80, 81. (以下、SPG年次記念大会の説教をSPG Sermonと略記)

らの野蛮人にとっての義務を負っていると考えているからである¹⁹。」

「白人の奉公人、先住民の奉公人、黒人で生涯の奴隷。これらはすべて我々の関心の目的である。我々の協会の第一の目標は、我々自身の人々の間で崩壊しているキリスト教の意義を保持すること。第二の関心は先住民と黒人を指導することであった。…黒人はプランターの監視下にあり、奴隷が共通の救いにあずかることが許されていないのは主人に責任がある²⁰。」

SPG はアメリカ植民地の人々の司牧および、先住民と黒人を教育するための宣教団体として設立されたといえる²¹。

(3) SPG 宣教師、教理問答師の活動方針

SPG の文書コレクションには勅許状の次に、宣教師の基準、宣教師への指示、聖職者への指示などが記載されている。宣教師は基準を満たし職務にふさわしい人物である必要があった²²。まず宣教師は次のことについて証言することが求められた。

I その人物の年齢、II 独身か既婚か、III 彼の気質、IV 彼の賢明さ、V 彼の学識、VI 彼のまじめで敬虔なキリスト教への帰依、VII キリスト教宗教への熱意と彼の神聖な職業における勤勉さ、VIII 現在の政府への好意、IX イングランド国教会の教義と規律に対する彼の遵奉

次に、SPG に雇用された宣教師への指示が箇条書きで述べられているが、その内容をまとめると以下のようであった²³。まず、宣教師は国教会の教義、礼拝、聖職者の行動規則を完全に知っていること。教区では国教会の典礼の規則を守り、日曜日の礼拝、毎日の朝夕の礼拝を公に行うこと。洗礼と主の晩餐の sacrament の性質と執行について、人々に注意深く教えること。さらに、子供や無知な人々に教理問答を行うことによって、他のすべての牧師の任務のための良い基礎を作ること。彼らに対しては最も易しく親しみやすい方法で教理問答を説明すること。異教徒や不信心者に教える時は、自然宗教の主義から始めて彼らの理性や良心に訴えること。それから、彼らに啓示の必要性和聖書に含まれている確実なものを示すこと。みずからの教区民をそれぞれよく訪問して、彼らがイングランド国教会で教えられるような宗教的儀式を続けるようにすること。国教会に反対する人々や異なる人々には、やさしく穏やかな精神で確信させ教化すること。さらに、子供たちに教えるための学校を建設することであった。

これらの指示に加えて、宣教師たちは教区記録簿をつける必要があった。教区記録簿 1 には彼の教区民の氏名、宗教の信仰告白、洗礼などを記録するようになっていた。教区記録簿 2 には六か月ごとに各教区の状態を記述して協会へ郵送し、事務局長と定期的に文通することとされた。

¹⁹ Philip Bearcroft, *SPG Sermon*, 1745, p. 17.

²⁰ Robert Hay Drummond, *SPG Sermon*, 1754, pp. 15, 16, 18.

²¹ Raboteau, pp. 114-115.

²² *Collection*, p. 16.

²³ *Collection*, pp. 20-26.

SPG 文書コレクションには教区記録簿 1、2 も収録されている²⁴。教区記録簿 1 では、それぞれの宣教師が彼の教区民と知り合いになったらすぐに記録することとなっており、以下の項目がある。I 教区民の氏名、II 宗教の信仰告白、III そのうちの誰が洗礼を受けたか、IV いつ洗礼を受けたか、V そのうちの誰が陪餐者か、VI いつ最初の聖餐を受けたか、VII 聖職者の職務においてどのような障害があるか

教区記録簿 2 はそれぞれの教区の宗教的状态に関して以下の項目がある。I 住民の人数、II 洗礼を受けた人数、III この半年に洗礼を受けた大人の人数、IV イングランド国教会の実際の陪餐者の人数、V イングランド国教会の信仰告白をした人数、VI すべての種類の非国教徒、特に法王主義者の人数、VII 異端と不信心者の人数

次に聖職者 (clergy) への指示が書かれているが²⁵、ここでの聖職者とは教理問答師や教師を意味していると思われる。

「子どもたちにキリスト教徒として信仰し生きるように教え、心構えをさせる。この目的のため、彼らにその他の敬虔で役立つ書物と聖書を読めるように、読むことを教える。彼らに教会の教理問答を完全に教える。最初にそれを明瞭に正確に読めるように教える。そして、その意図と意味を理解させるためにそれを完璧に暗記させる。そして、彼らが有益な職業に就けるように、彼らに明白で読みやすい筆跡で書くことを教える。同様の目的で算数も必要になるであろう。朝夕の祈りと毎日家で行う祈りを教える。日曜日に教会に来るようにさせる。聖書と祈禱書を持ち歩き、それらの使い方を教える。…インディアンと黒人、そして彼らの子供には、彼らにその準備があり機会があれば教える。六か月に一度、事務局長にそれぞれの学校の状態、生徒の人数、彼らの教え方について郵送する。」

この指示においては、対象はあくまで白人の子供であろう。次にアメリカ先住民と黒人、彼らの子供に教えることになっているが、教える内容は詳しく書いていない。聖書を読むために読むことは必要なスキルであったが、書くことや算数は宗教教育に必要なとはみなされなかったため、先住民と黒人には読むことのみが教育されたと考えられる。

2. 奴隷への布教の困難

(1) キリスト教徒奴隷の自由

SPG は奴隷に布教し改宗させようとしていたが、それは様々な理由で困難であった。お互いの言語が異なること、宣教師の人数は少ない一方で奴隷は多数であること、プランテーションは広大で一か所に奴隷が集まって学ぶことは難しいことなども原因であった。しかし、奴隷の主人からの反対が強かったことが、布教がうまくいかない大きな原因であったようである。奴隷をやさしく扱いキリスト教教育を受けさせる主人たちもいたが、たいていは利益を追求しており、さ

²⁴ Collection, pp. 27, 28.

²⁵ Collection, pp. 29, 30.

まざまな理由で反対していた。第一に、奴隷が教育を受けると労働時間がその分減る。第二に、洗礼を受けると奴隷が自由になり、自分たちの財産権が侵害される。第三に、奴隷が知識を持ち、高慢になり、勤勉に働かなくなる、さらには反乱を企てるようになるというのであった²⁶。

まず、奴隷商人をはじめ奴隷制を擁護する人々は、奴隷は人間ではなく単なる財産や家畜とみなしていた。彼らには救われる魂がないのでキリスト教徒になれないのであった。また、彼らは非常に愚かで野蛮で教育することは不可能であり、真実の改宗は決してできないという者もいた²⁷。

奴隷は多くの場合、一週間のうちで日曜日を休日とされていたという²⁸。主人は彼らに週に一日を彼らと家族を養うための食糧を耕作するのを許可していた。何人かは土曜日、土曜日半日と日曜日の場合もあり、ほかは日曜日だけを許可していた²⁹。ただ、奴隷はしばしば七日間毎日労働していたという意見もある³⁰。奴隷は畑で労働を行うが、家内奉公人 (House Servant) として使われる者もあった。このように奴隷は休みが少なく、休日ですえ自分自身と家族の食糧のために費やすので教育を受けることは困難であった。その上、主人たちは彼らの教育に関心がなかった。SPGの宣教師は布教活動を行っていたが、17世紀からイギリス人の間では洗礼を受けると奴隷は自由になると信じられており、主人たちは奴隷の改宗に反対していたという³¹。奴隷は主人の重要な財産であり、彼らは財産権が侵害されることに強く反発した。当時、キリスト教と奴隷制が両立するのかという問題が存在していた。キリスト教徒を奴隷にすることはできない、キリスト教徒となった奴隷は自由になれるという観念や習慣があり、キリスト教徒は奴隷ではありえないという考え方が一般的であった³²。キリスト教徒はキリスト教徒を奴隷の身分にしておくことができないのである。この思想を根絶することは困難であり、植民地時代を通じて存続していたのであった³³。

そのため、各イギリス領植民地の法律で、たとえ奴隷が改宗しても奴隷身分は変わらず自由になることはない定められても、主人たちは不安を感じていた³⁴。もしも奴隷が教育を受けキリ

²⁶ 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻(2015年)91頁; Gibson, 1729, rpt., 1760, pp. 18-21. 改宗した奴隷の自由についての国教会における議論の詳細は、青柳『イギリス哲学研究』第37号(2014年)を参照。

²⁷ 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻(2015年)91頁; Humphreys, 1728, p. 235.

²⁸ Humphreys, 1728, p. 234.

²⁹ Humphreys, 1728, p. 234.

³⁰ Gallay, p. 380.

³¹ Raboteau, pp. 97-99.

³² George Berkeley, *SPG Sermon*, 1732, p. 19; 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻(2015年)91, 92頁; Herbert S. Klein, "Anglicanism, Catholicism and the Negro Slave," *Comparative Studies in Society and History*, vol. 8, no. 3 (1996): 318-319; Chris Beneke and Christopher S. Grenda, *The First Prejudice: Religious Tolerance and Intolerance in Early America* (Philadelphia: U of Pennsylvania Press, 2011) p. 200.

³³ Klein, pp. 318-319.

³⁴ Beneke and Grenda, p. 200.

スト教徒になったら、奴隷は自由になり財産権が侵害されると考えられた³⁵。

(2) 主人による布教・教育への反対

奴隷の主人たちは、キリスト教徒になると奴隷が自由になるという恐れのほかにも、様々な理由で布教や教育に反対していた。教育への反対者は「教育は役に立たない、それは必要ない、それは多くの肉体労働の時間を奪う、奴隷を怠け者で高慢にする」という伝統を信じていた³⁶。ここでは宣教師からの書簡によって現地の様子を述べていきたい。

1708年8月24日付の、ニューヨーク市のSPG 教理問答師エリアス・ノー (Elias Neau) から SPG 事務局長ジョン・チェンバレン (John Chamberlain) への書簡によれば、教理問答師の人数はこの一年間、増え続けていたにもかかわらず、ノーは奴隷が教理問答を受けることに対して主人が好意的ではないことを嘆いていた。何人かは彼のところに来ようともしなかったという。彼はこう書いた。「奴隷が洗礼を受けることに主人が同意してくれることを希望しても、学校へこれ以上行ったら、彼らはヴァージニアに売られたり他の国へ送られたりすると脅されていた。…しかし、すべての主人がこのような意見というわけではない。」ノーの学校は妨害にもかかわらず発展し続けて、彼の生徒が教理問答を学んだあと、彼は彼らをトリニティ教会主任司祭ウィリアム・ヴィージ (William Vesey) のところに連れて行って試問し、自由白人の証人を伴って洗礼を受けさせた。1710年の復活祭に、彼の教理問答師となった二人の黒人男性と三人の黒人女性が洗礼を受けた。聖霊降臨祭に一人の黒人男性と二人の黒人女性が洗礼を受けた。多くの人々が主人の反対のために洗礼を受けないままになっているが、一方でフランス人たちは成功していたという³⁷。

次に、サウスカロライナの匿名の聖職者から SPG 本部への 1713年に書かれた書簡を紹介したい³⁸。「奴隷には牧師から教えられる時間が日曜日しかない。プランテーションは広大で互いに距離が離れている。奴隷が学ぶために一か所に集まることは出来ない。人数が多く危険であり、彼らが自由を回復しようとし始めるからである。奴隷がキリスト教徒になると悪くなるというのが一般的な主人の意見である。キリスト教主義を教えること、それは疑いなく彼らの義務であるが、その代わりに彼らはそう試みることをけなして中傷した。何人かの主人は正義を行っていることを忘れてはいけませんが、奴隷が改宗することはプランターの世俗的利益および有利さと一致しな

³⁵ 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻 (2015年)91頁; Gibson, 1729, rpt., 1760, pp. 13-18; Mary F. Goodwin, "Christianizing and Educating the Negro in Colonial Virginia," *Historical Magazine of the Protestant Episcopal Church*, 1-3 (1932): 143.

³⁶ Frank J. Klingberg, *Appraisal of the Negro in Colonial South Carolina: A Study of Americanization* (Washington: Associated, 1941) p. 5.

³⁷ Klingberg, "The S. P. G. Program for Negroes in Colonial New York," *Historical Magazine of the Protestant Episcopal Church*, vol. 8, no. 4 (1939): 315.

³⁸ Klingberg, 1941, pp. 6-7.

いと考えられてきた。奴隷がキリスト教徒になると悪くなり、教育に時間が取られ、労働の妨げになり主人の利益が減少するからである。…奴隷、とりわけ黒人はよこしまで頑固な人種であり、真実の改宗は決して出来ない。彼らは宗教の見かけを装って彼らの主人をだまし欺く。彼らはこのように結論づけた。それ[改宗]は彼らにとって、相当の損失であるだけでなく、何の効果もないことへ多くの時間と苦勞をつぎ込むことである。」

このように奴隷への布教・教育には反対意見が強かったため、SPG 宣教師や教理問答師の活動も困難だったのである。

(3) SPG の布教の努力

黒人奴隷への布教に反対する意見が強い中で、イングランド国教会の方針は教会は異教徒をキリスト教化する義務がある、彼らを暗闇から光へと導くべきであるというものであった。たしかに国教会聖職者も奴隷は非常に愚かであると考えていた。SPG 年次記念大会における説教や報告書でも、彼らの野蛮さや無知が強調されている。しかし、聖書には布教を推進するための言葉がある。たとえば、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい。(マタイによる福音書第 28 章 19 節)」「それから、イエスは言われた。全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。(マルコによる福音書第 16 章 15 節)」などである。SPG の説教においても、このような引用を用いて奴隷に布教することが熱心に説かれた³⁹。

ここでは、黒人奴隷へ積極的に布教すべきであると主張した説教・著作を検討したい。1711 年、セント・アサフ主教ウィリアム・フリートウッド (William Fleetwood) は、たとえアメリカと西インド諸島すべての奴隷が永遠に異教徒であり続けるとしても、バルバドスにおける SPG 所有の奴隷はキリスト教徒にする必要があり、彼らにキリスト教教育と洗礼を行い、永遠の命に至る道へ導かねばならないと述べている⁴⁰。

布教に反対の主人たちは、奴隷は単なる財産であり救われる魂がないと考えていた。一方、イギリス本国の SPG 年次記念大会の説教や国教徒の著作では、奴隷には魂があり、同じ出自の人間である、キリストは彼らのためにも血を流されたということを述べたものがあつた。1714 年、カンタベリ首席司祭ジョージ・スタナップ (George Stanhope) は、次のように述べた⁴¹。「奴隷は未開で無教育で、公共で売買され、荷物を運搬するための家畜のように働いている。しかし、彼らの魂は彼ら自身のために世話されるべきである。彼らは我々と同じ神によって創造され、同じ

³⁹ 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻 (2015年)93頁; Thomas Secker, *SPG Sermon*, 1741, pp. 7-9; Beilby Porteus, *SPG Sermon*, 1783, pp. 11-13.

⁴⁰ Fleetwood, *SPG Sermon*, 1711, p. 18. 前年の1710年に、SPGはバルバドスのクリストファ・コドリントン (Christopher Codrington) 大佐から二か所のプランテーションと300人の黒人奴隷の寄進を受けており、奴隷への関心が高まっていた。

⁴¹ George Stanhope, *SPG Sermon*, 1714, pp. 16-17.

肉体と血によって形成され、同じ共通の子孫からの出自であり、同じ魂を授けられ、不滅の幸福を同じように受ける資格がある。彼らもまた同じ尊いイエスのあがないによって解放される。生まれと富、環境と肌の色、野蛮と奴隷、これらは単に付随的な違いである。本質的な部分が同じであり続けている場合、そのようなものはあまり評価されるべきではない。」

1729年、ロンドン主教ギブソンは『ロンドン主教の二つの書簡』において、「私はあなたがたに、彼らを単なる奴隷として、労働する家畜と同じレベルで考えないよう懇願したい。そうではなくて、あなたがたと同じ体格と能力を持ち、永遠に幸福になれる魂と、そのための教育を受ける理性と理解力を持つ男性奴隷と女性奴隷として考えてほしい。」と呼びかけた⁴²。

SPG事務局長ベアクロフトも次のように奴隷も同じ人間で魂があると述べた⁴³。「我々のプランテーションでは、恥知らずにキリスト教の愛が無視されている。彼らは我々自身と同じ血統ではなく救われる魂がないかのように、貧しい黒人奴隷の改宗はおろそかにされている。一方で、聖パウロは我々にはっきりとこう言われた。『神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。』『その一人の方はすべての人のために死んでくださった。』キリストは彼の最も尊い血を彼らのために流されたのに、キリスト教徒は恥知らずに彼らを見捨てるのであろうか。」

また、事務局長ハンフリーズや国教会聖職者アンソニー・ヒル (Anthony Hill) は、奴隷の主人们は根拠もないのに黒人は魂がないと言って彼らに教育を受けさせず、キリスト教徒になるとさらに悪い奴隷になると主張して聖職者を迫害していることを批判した⁴⁴。

3. 奴隷の改宗の意義

(1) 改宗後の奴隷の身分

ただし、SPG関係者もプランターや奴隷貿易関係者と同様に、奴隷制そのものは認めていたようである。聖書において奴隷制は禁止されていないからである。たとえば、ロンドンデリ首席司祭ジョージ・バークリ (George Berkeley) は、プランターが黒人のことを不合理に差別し教育や sacrament を受けさせないことを批判したが、洗礼を受ければ自由になれるとか、洗礼を受けることは奴隷の状態と矛盾しているというのは誤った観念であると考えていた。彼は「福音の自由は現世の奴隷状態と両立する。そして、彼らの奴隷はキリスト教徒になることによってより良い奴隷になるであろう」と述べた⁴⁵。

⁴² Gibson, 1729, rpt., 1760, p. 25.

⁴³ Philip Bearcroft, *A Sermon Preached before the Honorable Trustees for Establishing the Colony of Georgia in America and the Associates of the Late Reverend Dr. Bray at Their Anniversary Meeting March 16, 1737-38...* (London, 1738) p. 19; 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻 (2015年)94頁。

⁴⁴ Humphreys, 1728, p. 235; Anthony Hill, *After Baptizatus* (London, 1702) p. 25; 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻 (2015年)94頁。

⁴⁵ George Berkeley, *A Proposal for the Better Supplying of Churches in Our Foreign Plantations, and for*

また、SPG 事務局長ダニエル・バートン (Daniel Burton) も、SPG は奴隷を保有する習慣を違法だとして非難することはできないと書いている。キリストの使徒たちによって与えられた主人と奴隷両方への教訓において、それとは反対のことが明らかに述べられているからである。もしも、奴隷制は違法であるという教義がイギリスの植民地で教えられたら、主人がそれを確信するかわりにより疑い深く残酷になり、より彼らの奴隷にキリスト教を学ばせようとしなくなるし、貧しい奴隷が奴隷制は違法だといって主人に反乱を起こすよう非常に強く誘惑されるので、双方にとって最も恐い結果が続くとしている⁴⁶。

すでに述べたように、イギリス人の間ではキリスト教徒に改宗した奴隷は自由になれるという観念や習慣があった。しかし、聖書では多くのテキストにおいて、奴隷は主人へ服従しなければならないこと、たとえ主人と同じキリスト教になっても服従することが書かれているのである。多くの SPG の説教や国教会聖職者の著作において、奴隷に洗礼を授けても、現世の身分および主人の奴隷所有にまったく変化は生じないということが強調された⁴⁷。奴隷は洗礼を受けても自由にはなれないということである。彼らは、奴隷制は古代から合法であることを主張し、洗礼を受けると奴隷は自由になれるという観念に反論した。そう主張することで、奴隷の解放や財産権の侵害を恐れる奴隷の主人たちを安心させ、布教活動を説得しようとしたと思われる。

セント・アサフ主教フリートウッドも次のように述べた⁴⁸。「主人が奴隷をキリスト教徒にしても、彼らの奉仕や利益を失う恐れはない。彼らがキリスト教徒を奴隷にとどめておくことは、神の法によっても国の法によっても禁止されていない。奴隷は洗礼を受けた後も以前と同様の状態である。…おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。キリストの信仰を持ったとしても、彼は以前と同じ生活状況が続くことから逃れられない。それは現世における彼の状況を変えることはない。キリスト教の自由はまったく精神的なのである。現世において、キリストの法律はこの性質を変化させない。…我々の国では、奴隷を所有することや所有し続けることは合法であり、同様に、彼らがキリスト教徒であっても奴隷として所有すること、そうし続けることは合法である。」

SPG 年次記念大会の説教等では、奴隷へのキリスト教教育は必要であるが、奴隷がキリスト教徒になってもその奴隷状態に変化はない、財産所有に変更はなされないという発言は数多くみられる⁴⁹。ギ

Converting the Savage Americans to Christianity... (London, 1725) p. 5; 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻 (2015年)94頁。

⁴⁶ William Knox, *Three Tracts Respecting the Conversion and Instruction of the Free Indians and Negroe Slaves in the Colonies, Addressed to the Venerable Society for Propagation of the Gospel in Foreign Parts in the Year 1768*, new ed. (London, 1789) pp. 26-28; 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻 (2015年)94頁。

⁴⁷ 青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻 (2015年)95頁。

⁴⁸ Fleetwood, *SPG Sermon*, 1711, pp. 20-21.

⁴⁹ Samuel Bradford, *SPG Sermon*, 1720, p. 37; Richard Smalbroke, *SPG Sermon*, 1733, p. 38; Martin Benson, *SPG Sermon*, 1740, p. 19; Thomas Secker, *SPG Sermon*, 1741, p. 22; Thomas Newton, *SPG Sermon*, 1769, p. 27.

ブゾンも同様に、『ロンドン主教の二つの書簡』において奴隷身分を擁護した⁵⁰。以上のようにイングランド国教会は奴隷制を擁護しており、たとえ奴隷がキリスト教徒に改宗しても自由にはなれないという立場であった。

また、事務局長ハンフリーズによれば「海外福音伝道協会は、黒人を改宗させる最も効果的な方法は、彼らの主人に改宗に同意し促進してもらうことだと常に気づいていた」という⁵¹。SPGは布教の許しを得られるよう奴隷の主人を説得するためにも、奴隷が改宗しても自由になることはなく、主人の財産権は侵害されないことを強調したのではないかと思われる。

(2) キリスト教徒奴隷と主人の利益

奴隷のキリスト教教育と洗礼を熱心に推進していくためにも、さらに SPG 宣教師や国教会聖職者は奴隷の改宗の利点を訴えた。つまり、野蛮な異教徒の奴隷がキリスト教徒になると従順な良い奴隷になると主張したのであった。SPG 年次記念大会における説教を検討すると、そのようなことを説いた国教会の高位聖職者は以下のように複数いた。

1719 エドワード・チャンドラ (Edward Chandler) リッチフィールド&コヴェントリ主教

1720 サミュエル・ブラッドフォード (Samuel Bradford) カーライル主教

1733 リチャード・スモールブルク (Richard Smalbroke) リッチフィールド&コヴェントリ主教

1734 アイザック・マドックス (Isaac Maddox) ウェルズ首席司祭

1754 ロバート・ヘイ・ドラモンド (Robert Hay Drummond) セント・アサフ主教

1759 アンソニー・エリス (Anthony Ellis) セント・デヴィッド主教

1769 トマス・ニュートン (Thomas Newton) ブリストル主教

1783 ビールビ・ポーティアス (Beilby Porteus) ロンドン主教

奴隷は野蛮で反抗的で邪悪であるが、キリスト教徒になると従順で良くなり主人にとって利益があると述べた説教は多い。例えばチャンドラは、主人に反抗的な黒人奴隷に対する最良の防衛は、彼らにまじめなキリスト教徒になるように教えることであって、そうすれば、奴隷はうわべだけでなく彼らの主人に従うであろうと述べた⁵²。奴隷の野蛮さや残酷性を強調する説教もあった。マドックスは「先住民と黒人は迷信深く、愚か、残酷、野蛮、野蛮人である。キリスト教の教えは、彼らの間によく見られるこれらの邪悪な性質、誤り、不機嫌、復讐心、残酷性を正すであろう。特にプランテーションで生まれた子供は宗教と美德の主義をより容易に学ぶであろう。そして、彼らの主人により忠実でより役に立つようになるであろう⁵³。」と書いている。また、

⁵⁰ Gibson, 1729, rpt., 1760, pp. 21-22.

⁵¹ Humphreys, 1728, p. 248.

⁵² Edward Chandler, *SPG Sermon*, 1719, p. 28.

⁵³ Isaac Maddox, *SPG Sermon*, 1734, pp. 26, 29.

奴隷は不機嫌で復讐心が強いと考えられていたようである。しかし、ドラモンドやエリスはそのような奴隷でもキリスト教の影響を受ければ、主人には大きな利益がもたらされるとしている。ドラモンドはキリスト教主義が奴隷の復讐心を抑え、彼らの不機嫌な精神を和らげ、彼らの間の平和と満足、節制と勤勉の意識を啓発するであろうと述べた⁵⁴。また、エリスも次のように主張した。「宗教によって不機嫌や復讐心が減少し変更されるので、彼らはより良い奴隷になるであろう。彼らが誤りを犯すのを防ぐために常に監視する必要があったが、そうではなく、彼らは主人の擁護者になる。そして、もはや彼らの間にはそのような反乱は起きないであろう⁵⁵。」一般的に、主人たちは奴隷が一か所に集まって学校教育を受けたり、主人と同じキリスト教徒になったりすると反乱を企てる恐れがあると考えていたが、エリスは逆に反乱は起きないと述べている。

一般的に黒人に洗礼を受けさせることは反対が多かったが、ブラッドフォードは奴隷に洗礼を受けさせることによって、彼らを第一に天におられる偉大な主の奴隷に、そして同時に彼らの現世の主人のより良い奴隷にするであろうと述べた⁵⁶。スモールブルクは奴隷にやや同情的であり、奴隷をより人間的に扱い、家畜ではなくイギリス人の同胞のキリスト教徒として扱えば、彼らは自分たちのより忠実な奴隷になるであろうと主張した⁵⁷。ニュートンは奴隷への布教に反対してくるプランテーションの経営者にも言及し、奴隷が真実の宗教の教えを受けることに経営者が嫉妬しないことを希望した。キリスト教徒になれば奴隷の性質は穏やか改良され、人にではなく主に仕えるように喜んで仕える臣下になるからである⁵⁸。

SPG 年次記念大会以外の説教であるが、1738 年にベアクロフトは以下のように述べた。「黒人をキリスト教徒にすると奴隷として駄目になるという誤った観念がある。しかし実際は逆で、黒人がより良いキリスト教徒になれば、より正直になり、より満足し、より服従し、より勤勉になるのである。彼を強力にするキリストを通して、厳しい状態のすべての労働を機嫌よく行うようになる。もしも、洗礼を受けた黒人の中でこのようではない者がいたら、彼らは真実のキリスト教の精神と神聖な極めて重要な主義をまったく知らないのである⁵⁹。」

以上が説教にみられた言説であるが、次に現地の状況を検討する。植民地に派遣された宣教師から SPG 事務局長への書簡でも、同様の主張がみられる箇所があった。ニューヨークは SPG の黒人への布教が特に盛んな地域であり、18 世紀初頭からアメリカ革命まで途絶えることなく宣教師や教理問答師が派遣され、学校教育も行われていた。ニューヨーク市の宣教師エリアス・ノーは定期的に SPG 本部へ書簡を送っており、奴隷に関する記述も多い。彼は 1711 年 5 月頃「主人たちは、この高名な協会の困難や出費が成果のないことではないと理解し始めるであろう。なぜ

⁵⁴ Robert Hay Drummond, *SPG Sermon*, 1754, p. 19.

⁵⁵ Anthony Ellys, *SPG Sermon*, 1759, p. 30.

⁵⁶ Samuel Bradford, *SPG Sermon*, 1720, p. 37.

⁵⁷ Richard Smalbroke, *SPG Sermon*, 1733, p. 37.

⁵⁸ Thomas Newton, *SPG Sermon*, 1769 p. 27.

⁵⁹ Philip Beacroft, 1738, p. 19.

なら、キリスト教宗教は彼らの奴隷に主人と女主人への愛と従順を鼓舞するからである」と書いている⁶⁰。

また、サウスカロライナもニューヨークと同様に奴隷への布教が熱心に行われた植民地であった。1710年6月13日、サウスカロライナのグース・クリーク付近セント・ジェームズ教区の宣教師フランシス・ルジョ (Francis Le Jau) は次のように書いた⁶¹。

「我々の黒人奴隷の人数は約 500 人で、その三分の一以上が子供である。…4 人か 6 人がすぐに彼らの主人の同意によって洗礼を受けるであろう。そして、死亡の危険がなければこのほかの子供たちも受けるであろう。これらの奴隷達はとてもよく行動しており、以前よりも彼らの主人の利益のためにより良い行動をしている。なぜなら、彼らはキリスト教の愛と義務から奉仕するように教えられたからである。彼らは私に率直にこうやってきた。彼らは以前には知らなかった良いことを知るようになったので、神を賛美しようとしているのだと。」

また、ルジョは 1712 年 12 月 11 日にこう記述した。「何人かの黒人奴隷に洗礼をした。彼らの主人は私の計画に非常に反対しており、何人かは、彼らがどのように神に祈り神に仕えるのかを学ぼうとして教会に来る許しを与えようとしな。私は、洗礼は奴隷を高慢で不忠実にするという古いもっともらしい理屈以外、新しい反対の理由を見出すことが出来ない。私は彼ら [主人] に、私が洗礼をしてきた人々の例から、それは正反対であることを確信させようと努めた。主に聖餐が認められた人々は非常に良くふるまっている⁶²。」イギリス本国の主教たちの説教のみならず、現地の報告では、実際にキリスト教徒奴隷が非常に良くなったと書かれているのである。

最後に、19 世紀初頭になるがロンドン主教ビールビ・ポーティアスの著作を取り上げたい。彼は 1808 年『イギリス領西インド諸島における総督、立法府、プランテーション経営者への書簡』を刊行し、主人側に対して奴隷を改宗させるように説いている。また、改宗させると良い面があること、実際にキリスト教徒奴隷が良くなっていることを具体的に述べた⁶³。

西インド諸島への教区学校の導入を妨げているもう一つの反対は、何人かの経営者が抱いている、彼らの黒人を良いキリスト教徒にすると彼らが悪い奴隷になるという考えである。彼らに洗礼、礼拝、聖餐式を認めることによって、そして他の福音の恩恵と利益を認めることによって、それらは彼ら自身の水準にあまりに多くをもたらす。彼らの状態を超えて彼らの思想を高め、高慢と野望を引き起こす。彼らを労働に適さないようにして、彼らの卑しい立場の義務を果たさないように、彼らの主人に従順でないように服従しないようにする。…

⁶⁰ Klingberg, 1939, p. 316.

⁶¹ Klingberg, 1941, pp. 17-18, 124-125; Klingberg ed., *The Carolina Chronicle of Dr. Francis Le Jau, 1706-1717* (Berkeley: U of California Press, 1956) p. 76.

⁶² Klingberg, 1941, pp. 124-125.

⁶³ Beilby Porteus, *A Letter to the Governors, Legislatures, and Proprietors of Plantations, in the British West-India Islands* (London: T. Cadell and W. Davies, 1808) pp. 22-24.

しかし、実際、真実のキリスト教がそのような結果を招いたであろうか？ …謙虚さ、満足、忍耐、服従、主のためにすべての人の法令への従順を熱心に説き聞かせる宗教が、野望、高慢、不満、合法的な権威への抵抗をもたらすことができるであろうか。…

いくつかのイギリス領の諸島、特にアンティグアで何千人の黒人奴隷がキリスト教徒へ改宗した。彼らの場合はどうなっているか。改宗によって、彼らは高慢で横柄で労働しようとして、主人に反抗的で服従しなくなったであろうか。まったく逆である。彼らは節制、勤勉さ、正直、忠実、主人への愛着において、改宗していない奴隷よりもはるかに優れている。…すでに私が見たように、それは黒人の異教徒の兄弟よりも高い値段を彼らに与えるであろう。

この著作が書かれた時、SPG が 1701 年に設立されてから百年以上経過しているが、依然として主人から奴隷の改宗や教育に対して反対が強いことがうかがえる。これまでの国教会聖職者の説教、著作、宣教師からの書簡にみられたように、ポーティアスは改宗したキリスト教徒奴隷は高慢な悪い奴隷になるどころか、主人に忠実な良い奴隷になると主張している。たしかに奴隷への布教は順調にすすまなかったが、SPG の活動が不活発であったとか熱意がなかったとはいえない。18 世紀を通して SPG は困難の中で主人の説得を続け、奴隷にキリスト教教育と洗礼を行っていたのである。

おわりに

一般的にイギリス領アメリカ植民地において、奴隷所有者や奴隷貿易関係者は奴隷を人間ではなく財産とみなしており、宗教教育や洗礼には反対していた。黒人奴隷は非常に愚かで魂もないため、キリスト教教育を受けさせることは不可能とされ、主人たちは教育には無関心であった。また、奴隷の改宗には様々な理由で反対が強かった。イギリスでは、洗礼を受けた奴隷は自由になるという習慣が信じられていたのである。また、宗教教育を受けてキリスト教徒になれば、高慢になり働かなくなる、悪い奴隷になる、反乱を起こすと考えられていた。このような状況で、イングランド国教会の公式布教団体である SPG は奴隷には魂があり教育は可能であるとして、布教を推進した。また、国教会聖職者は奴隷に布教するためには第一に主人の同意や支援が必要であるとして、奴隷の改宗が主人にとっての利益になると説いたのである⁶⁴。本稿では SPG 年次記念大会の説教等、国教会聖職者の著作を検討したが、改宗すれば愚かで野蛮な奴隷が従順で勤勉な良い奴隷になるということが述べられていた。

ただし、主人からの反対は非常に強く、奴隷への布教は 18 世紀の終わりになっても順調にすすまなかった。また、奴隷の魂の救済について述べた説教もあったが、奴隷のためというよりも、改宗すれば良い奴隷になり主人のためになるという説教が多い。布教の本来の目的は黒人奴隷の魂の救済であるにもかかわらず、主人はそのようなことにはほとんど関心がなかった。主人の許

⁶⁴ Raboteau, p. 103.

しがないと布教が出来ず、国教会側は彼らを説得しなければならなかったのであろう。それでも、奴隷の教育や改宗に賛成の主人も存在しており、SPG は学校を建設してキリスト教教育を熱心に行い、改宗者を増やしていった。現地の宣教師からの書簡からも、キリスト教奴隷が良くふるまっていることが述べられている。SPG の異教徒への布教は不活発とみなされているが、奴隷が人間とみなされていなかった時代に、SPG は主人に奴隷の改宗のメリットを訴えながら布教を実行し成果を挙げた。18 世紀における SPG の奴隷への布教には一定の意義があったと思われる。

さて、18 世紀後半になるとイギリスでは奴隷制廃止の動きが高まり、クエーカーなどの非国教徒のみならず、国教徒の有力政治家の中にも奴隷制廃止に賛成する者がいた。同時期に国教会聖職者からも、SPG 年次記念大会の説教で奴隷貿易や奴隷制に反対する者が現れた⁶⁵。SPG の布教活動はこのような奴隷制に反対する国教徒や国教会聖職者に影響を与えたのであろうか。たしかに SPG は奴隷を人間的に扱いキリスト教教育や洗礼を受けさせようとしていたが、キリスト教徒になっても奴隷身分は変わらないとして奴隷制を擁護していた。そのため、彼らと SPG の活動や思想との関係性はあまりなく、彼らは人道的な理由から奴隷制に反対したのではないかと思われる。奴隷制廃止に関する思想や運動については今後の課題としたい。

付記：本稿は、平成 25～28 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C) 課題番号 25370866）、平成 25～28 年度科学研究費補助金（基盤研究 (A) 課題番号 25244035）および平成 27 年度大分大学教育福祉科学部短期プロジェクトによる研究成果の一部である。

⁶⁵ 詳細は青柳『大分大学教育福祉科学部紀要』第37号1巻（2015年）を参照。